

南西アジア文化研究会のパキスタン交流プログラム

和光・バローチスターン大学交流史と新学科

村山和之

本学非常勤講師

美術交流・教育の現場視察を目的とした川添修司教授（芸術学科、南西アジア文化研究会世話役）、南西アジア文化研究会代表である松枝到教授（人間関係学科）、および村山和之、大坪潤子ら本学非常勤講師二名を加えた全四名は、一九九八年八月九日、パキスタン・バローチスターン州都クエッタ（Quetta）に到着した。ここクエッタでは、一〇年来の交流を続けている国立バローチスターン大学（UOB・University of Balochistan）において、新設されたばかりのバローチスターン研究センター（BSC・Balochistan Study Centre）、および美術学科（Department of Fine Arts）の二学科を公式訪問した。その目的は、両大

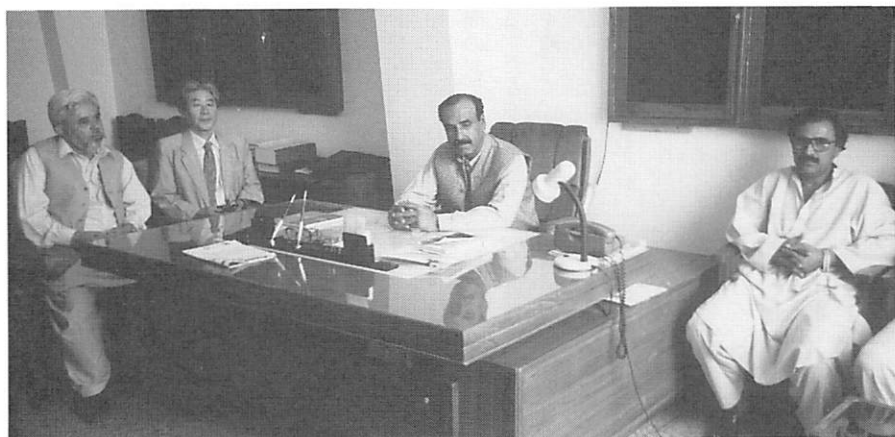
学教官・学生における学科間交流のアウトライン作りの第一歩としてミーティングをもつこと、さらにこの大学を訪問した初めての外国人美術教授として美術学科の教員や学生と意見・技術交換を試みることであった。

美術学科での詳細については大坪講師の報告にゆずるとして、ここでは和光大学とバローチスターン大学の交流史と、バローチスターン研究センターについてメモを残しておきたい。この学科は新設されたばかりと書いたが、その設立経緯についてまず触れてから訪問の様子を伝えることにしよう。

一九八九年、和光大学・象徴図像研究会がスウェーデンのウプサラ大学やイタリアのナ

ポリ東洋大学等に続いて、初めてこの地に足を踏み入れ、本大学を訪問したとき、パキスタン研究センター（PSC・Pakistan Study Centre）という名前の学科が応対してくれた。パキスタン国内を対象とした研究領域の範囲で修士 M.A.、哲学修士 M.Phil.、哲学博士 Ph.D.の学位を取ることができ、当時、バローチスターンの文学、言語、民俗についてもこの学科に入って勉強することになっていた。教員たちもそれぞれの分野で国際的に評価を受けていた傑物揃いである。

現在の学長で経済学者バハードウル・ハーン・ローデニー教授をはじめとして、歴史学の生き字引こと旧カラート汗国宮廷大臣ア



BSCの教官たちと・右からハミード講師、サービル所長、川添教授、アービド教授



パキスタン訪問ルート

ーガー・ナスィール・ハーン・アフマドザイ氏を特別講師に、バルーチ語教本の定本とされている『基礎バルーチ語』^{※2}を共著で世に出した言語学者故ミール・アーキル・ハーン・メーンガル教授、バルーチ文学者として世界的権威でありながら健康上の理由で現在は退官しているアブドゥラー・ジャン・ジヤマルディーニ教授、詩人としてブラーフイー文学者として著名なナーディール・カンバラーニ教授、パシュトー文学研究者として

評価の高いスィヤール・カーカル教授とアービド・シャー・アービド教授らのそうそうたるベテラン陣と、現在のBSCの中心となる当時まだ若手であった講師陣からなっていた。

一九九〇年まで続いた二回の調査は、この学科の教員や事務職員たちの全面的な協力によって予想以上の成果をあげ、人的交流の基礎を強く固めるとともに、『バルーチスターン調査概報』(一九九二年、象徴図像研究会)という記念碑的報告書刊行につながった。

一九九一年、元来のPSCを残しながら、民族語文化教育に特徴を持たせた修士のみの新設学科、言語学科(Department of Languages)が誕生し、それぞれパシュトー語専攻、バルーチ語専攻及びブラーフイー語専攻をおいた。後にペルシア語学科(Department of Persian)も新設され、バルーチスターンの地で使用されている民族語教育に関しては恵まれた環境を整えるに至った。

UOBの教官たちが、バルーチスターンに共存する民族文化研究を押し進めるに当たって、常々、意識していた研究機関の理想が、サインド州ハイデラバード郊外にある国立ジャムシヨロー大学サインド学研究所^{※3}である。

そこではスインディー語辞書の編纂やスインド文化に関する書物の発刊、スインディー民族音楽の記録と出版、研究所内の民俗博物館運営などが行なわれ、自民族文化研究という点ではパキスタン内の他大学に大きく水をあける先進的機関であり、国際的評価も高かった。

当時、言語学科及びパキスタン研究センターの教官たちには「パローチスターンには豊かな文化がある、発掘の余地を残した考古学的遺跡や、言語学的注目もされているのは既知であるけれども、私たちには科学としての学問の対象として取り組む技術が欠如している」だから「海外の研究者たちとの共同作業を通して、協力すると同時に新しい技術を学び取りたい」といった願望を常に抱いていた。そして、機会が巡ってきたときは是非パローチスターンの地域文化研究をメインとするアカデミック・センターを設立すべく虎視眈々とねらっていたのだ。

一九九七年年度、前学長であったリアズ・パローチ博士の後任としてPSCの所長だったバハードウル・ハーン・ローデニー教授が着任すると、現BSC所長ラザーック・サ

ービル助教授を旗頭として中堅の教官たちが学科新設の申請を行ない、驚くべきことにまさに私たちの目前で学長の内定を取り付けたのであった。

一九九八年、BSCは始動をはじめ、学生を入学させるのは一九九九年度であるが、旧本部校舎の中庭を囲むように博物館展示室、図書室、会議室、セミナー室そして各人の研究室からなるスペースが与えられ、事務室のコンピュータは電子メールで和光大学ともつながっている。

この学科の構成員を見てみよう。所長に、一九九五年、和光大学芸術学科主権のシンポジウムにも招聘したブラーフィー文学専攻のラザーック・サービル助教授、南部パローチスターン・マクラーン地方出身のパローチ文学専攻スプール・パローチ講師、パシユト文学専攻は前述したアービド・シャー・アービド教授、さらに美術学科から出向してきた芸術専攻のアクラム・ドースト・パローチ講師とパローチスターン諸民族文化について一人ずつの理論系専門教官と博物館事業にも関われる実技系の教官を配している。さらに、出版庶務を念頭に雑誌編集実務の豊富な職員

を加えた体制を敷いている。すでに、BSCのリーフレットは発行され、私たち和光大学芸術学科、南西アジア文化研究会の親善訪問が活字となつて伝えられていた。

和光大学・パローチスターン大学交流年表

——一九八九年、第一回調査

象徴図像研究会（日本私学振興財団資金）

——一九九〇年、第二回調査

象徴図像研究会。共同で祭典・聖地調査

（同）

——一九九一年

村山和之個人による訪問、音楽調査

——一九九二年

村山和之、パローチスターン大学留学

——一九九四年

ブラーフィー・アカデミーとの共催で国際

シンポジウム、和光大学からは前田耕作、

村山和之が招待を受け、村山が発表（クエ

ッタ）

——一九九五年

和光大学シンポジウム「アジア南道の歴史

と文化」UOBから二名招聘

——一九九六年、第三回調査

共同作業（文部省科学研究助成金）

——一九九七年、第四回調査

共同作業（同）

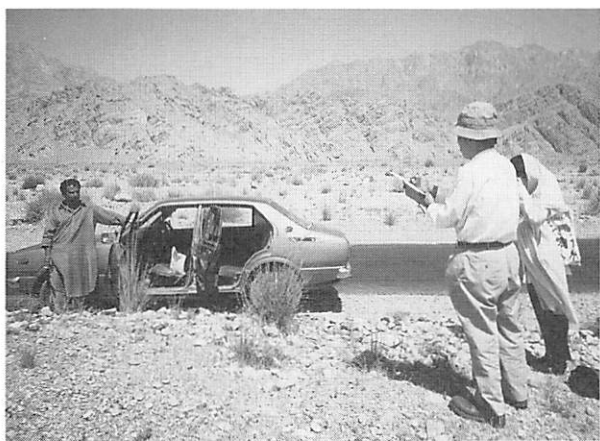
——一九九八年

補足調査、中村忠男・村山和之

——一九九九年、第五回調査（予定）



BSCでのミーティング



ダシトでのスケッチ



BSCの展示室でフェルト（ナマド）をみる

バローチスタン研究センター（BSC）訪問

クエッタに到着しバザール内の常宿に荷を降ろすと、到着日を知っているサービル助教授の研究室を訪ね、翌日の大学訪問プログラムの打ち合わせを行なった。学長の希望としては、出張から戻った翌日に盛大にセレモニ

ーを行ないたかったようだが、あいにく私たちの滞在旅程が短く、今回は学長不在ですすめることになった。——一時にBSCを訪ね、ミーティングを行なってから美術学科のアトリエを訪問し教官や学生たちと意見交換する。その後はサービル助教授の自宅で、バローチ民族料理のもてなしを受けることとなった。

八月一〇日、定刻に大学へ到着するとBSCメンバーのあたたかい歓迎を受けた。彼らが駆けつけ一杯のお茶とミーティングの前に私たちを案内してくれたのが、博物館となる

展示室であつた。そこにはパローチストーン諸地域で出土した考古学的遺物のほか、パローチストーンの民俗文化を物語るさまざまな民具、装飾品、織物、刺繍のコレクションが壁面やケース内に展示されていた。この場所こそ彼らの夢が実現した展示室である。収蔵品は個人寄贈が多いが、パローチ族の資料収集はアクラム・ドースト先生に負うところが大きい。彼自身、パローチ刺繍の大変な蒐集家で、自らの作品の中に刺繍パターンモチーフを取り入れている。こういうフットワークの軽いメンバーを加えたことはBSCにとって成功であると思われる。

展示室をひととおり案内されたあとは、会議室の長テーブルについてお茶とビスケットが供され、日付を打ったBSCレターヘッドが配られるとミーティングが始まった。

まず神の御名において開会が宣言され、司会のサービル助教による歓迎の言葉が述べられ、BSC活動の概要説明がなされた。和光大学からは川添教授が歓迎に対する返礼と訪問の目的が告げられた。言語は英語・日本語・ウルドゥー語が使用され、全体として和やかな雰囲気の中、人的交流プログラムの具

体化、技術的相互援助、収集資料の共有化などについて意見が交わされ、今後とも永続的親交を努力しようという原則を確認しあうことができた。

ミーティングで紹介、討議された内容の要旨を紹介する。

まず、BSCの設置目的については、以下の三柱からなる主旨をあげている、

一、パローチストーンにおける歴史・言語・文化・社会に関するあらゆる研究活動を行なう。

二、調査研究。交流をもとに研究成果を公表し、紀要を発行する出版事業を行なう。

三、急速に失われつつあるパローチスターンの伝統的民俗文化を記録にとどめ後世に伝えるための博物館活動を行なう。

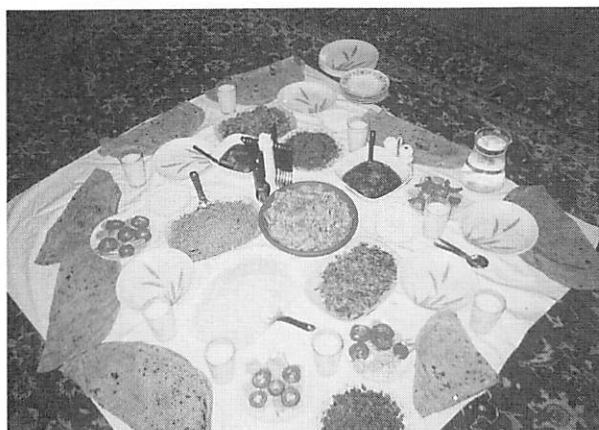
教育機関としては、修士M.A.、哲学修士M.Phil.、哲学博士Ph.D.のコースを設置する。

一九九九年から学生を募集し、パローチスターン文化遺産に関する国際記念セミナーを開催し、世界中の研究者を招く予定でもあるという。私たちとの共同調査から得た成果としてフィールドワークに重きを置くとも聞く。新学科として、和光大学に、さらには日本

政府援助に対する協力要請もなされた。彼ら自分たちの研究・教育環境を整え、永続的な活動をしていくためにまず必要だと説いたのが、既存の我々教員同士による継続的交流に加えて、人間を育成すること、つまり学生から若手研究者のトレーニングである。それぞれの追究したい主題に沿って、適切な方法や技術を研修させるプログラムのために人的援助がなによりも必要であると痛感している、という。

それに対して、国際交流基金や政府の無償文化協力援助について情報を提供し、可能な限り協力を惜しまないことを約束する。

研究分野に関しては、考古学と博物館学に対して専門の研究協力者を早急に欲している。周知の事実ではあるが、パローチスターンの高原は考古遺跡の宝庫である。インダス文明成立に先立つ集落遺跡が分布し、大学近くのケーチベーク村では発掘も行なわれた。一步郊外にでて車を走らせれば、人造の小高い土丘(ダンブ・バヒ)がたぐさんあり、そのほとんどが発掘されていない。ブラーフィール語では、考古学者を意味する言葉に「ダンブを識る者・damb chack」をあてている。この



サービル先生宅でのバローチ民族料理

日常にあるダンブを放っておく手はない。今まで主にアメリカ隊、フランス隊、イタリア隊によってなされてきた発掘調査を、自分たちの手で行ないたい、そのためには考古学の専門家による指導と技術習得が必須である。そして、フィールドで発掘収集した資料をどのように取り扱うかを博物館学芸員に指導し



メロンを売る男たち

てもらいたい。分類はもちろんのこと、保存修復、展示の方法などすべて学びたい。

これに関しては、趣旨には賛同するが即答を避け、トレーニング・プログラム実現に向けての協力は惜しまないが、具体化するためには実際の計画が必要であり、見切り発車ではなく実現の可能性が見えるまで新学科と

しての実績を積んでからの方が、双方とも対等に協力しあえるのでは、とコメントする。

新学科の書棚を飾る図書寄贈の申し出もあった。中でも日本文化に関する資料は何でもよいから寄贈してほしいという。これに対して、少しずつ寄贈していくのは実現するけれど、まず二大学間の交流史に遡って、私たちが共同で作業してきた調査成果や記録した資料を使える形にしてBSCに里帰りさせ、学科の財産として教材として役立ててはどうかという提案を行なった。この一〇年間、バローチスタンでのさまざまな調査活動は、UOBの教官たちの協力なしでは何一つできなかったであろう。おかげで、適切な人脈を、そして写真・ビデオ・テープ・スケッチなどで時代の瞬間を記録した資料を、和光大学の財産とすることができた。そこで、さしあたって一九九六年から九七年にかけて行なった調査で記録したビデオテープを、なるべく手を加えずに、PALシステムに変換ダビングして次回の訪問時に寄贈することとした。同様に、音楽資料はMDやビデオの音源からカセットテープにおこして、写真は希望のものを紙に焼いてそれぞれ寄贈する。それ以外の

資料に関しても希望に添って徐々に作業を進める準備があることを明言する。

さらに、新学科の紀要として「Balochistan Review」が発刊される予定で、これに對して英語で寄稿を求められた。喜んでお受けすることにする。和光大学でも、バローチスターンの研究者から三編ほど英語の論文を預かり活字化する準備を進めているので、紀要交換についても打ち合わせをする。象徴圖像研究会時代に活字化された報告はすべて日本語であり、少なくとも英語で読みたいという要望にさらされてきた経緯もあつて、現在英訳の可能性を探っている時点でもある、と伝える。

和光大学からは、今後の人的交流を永続的なものとするを特に要請し、近い将来、教員同士はもとより学生間の交流を実現させようと話に花を咲かせた。バローチスターンに興味を持って勉強に来る学生はいつでも歓迎してくれるとのことだ。

クエッタ点景

こうしてミーティングは終了し、一人ひとりと握手を交換して次回の再会を誓った。この後、美術学科を訪問し、教員住宅にあるサ

ービル助教住宅で歓迎昼食会に与ることになる。先生は、意識的にバローチ族の伝統的な料理をメニューに入れてくださり、バローチスターン初訪問の川添教授をはじめ私たちをもてなしてくださった。

食布に並べられた皿を覗いてみる。祝祭日にしか作らない手延べ麺料理（*Naecha*）は、短く細いマカロニに近く、甘い味付けがされておりデザートとして食す。フルード（*Furud*）は羊の乳から作った干しチーズを溶かした独特の香りと味を持つスूपで、ナーンをひたしたりご飯に混ぜて食べる。彼らの無意識を流れる遊牧民としての血が、定住して何世代も経過しても、典型的な遊牧民料理フルードを好むのだという。どれも美味しいものだった。

クエッタを離れる前日、私たちは車を借りてラク峠方面へとスケッチピクニックに繰り出した。道を横切る羊の群に減速しながらもクエッタから南へ約二五キロ走って着いたラク峠は、名峰チルトン山の一部分だが、峠の最高地点からはすばらしい眺望が得られる。眼下には緑の果樹園とイラン国境へと続く茶色の荒野が入り混じって展開する。荒野はこの

地ではダシト（*Dashit*）と呼ばれているが、「不毛の」という修飾語は必ずしも適切ではない。春は緑、赤、黄色の草原にしてお花畑、そして今回八月の時点でも、スケッチのために停車したダシトのまった中に、野生の淡いラベンダーの花をたくさん見つけることができた。さらに一雨あるとダシトの色は一変するのだ。このような季節ごとのダシト花暦は個人的に非常に関心の高いテーマであり、民謡解釈にも民間薬学にも不可避である。

ダシトでのスケッチを終えると、ちょうど収穫時だと聞いていたラグビーボール大メロン（ハルブーザ）の集積所をクエッタ郊外に見学した。メロンの原産地の一つであるとも紹介されたこの地では、広大な市場に多数のダンブが止まり、山積みになったメロンを投げおろしている。辺り一面にメロンの甘い香りが漂い、クッション用の藁と粗末な箱で荷造りが行なわれている。車から一歩でて、メロンを売る男たちに囲まれパシュトー語で捲し立てられていると、大学教室から学問を現場に持ち出そうと試みるBSCの教官たちに敬意を表したくなった。彼らならここで学生になんを見せるのだろうか。試しに一つ買って

みることにして「パソールディ? (いくら)」と尋ねる。と、メロンマンは青いボールペンで黄色のメロン皮に「一〇〇ルピー」と直接

書きなぐると、うれしそうにこちらに見せてくれた。

バローチスターン研究及びBSCとの交流

は、こういう教官たちが現役のうちは途絶えることはまずない、と実感したのはこの時であった。そして今年もまた出かけてゆく。

《註》

Sind.

*1 Bahadur Khan Rodeni, Mir Agha Nasir Khan

Ahmadzai, Late. Mir Agil Khan Mengal, Abdullah

Jan Jamaldini, Nadir Qambarani, Siyal Kakar, Abid

Shah Abid

*2 Barker, M.A.Rahman & Agil Khan Mengal

1969 A Course in Baluchi Vol.I. & II. McGill

University, Montreal, Canada

*3 Institute of Sindology, Janshoro University.

*4 出席者をここに記しておきたい。

The Attendance in the meeting at BSC. on 10-8-98.

〔バローチスターン研究センターBSC〕

A・ラザーック・サービル Dr.A.R.Sabir

(Director/ Brahui)

A・シヤー・アーブル Prof.A.Shah Abid (Pashio)

A・ハミード・シヤーフーニー Lect.A.Hamid

Shahwani (Head.Dept.of Brahui)

スプール・バローチ Lect.Subul Baloch (Balochi)

アklam・ドースト・バローチ Lect.Akram Dost

Baloch (Dept. of Fine Arts)

〔和光大学 WAKO Univ.〕

松枝 到 Prof.Iharu Matsueda (Art History)

川添修司 Prof.Shuji Kawazoe (Oil Painting)

村山和之 Lect.Kazuyuki Murayama (Folklore)

大坪潤子 Lect.Junko Ohtsubo (Art History)